

まえがき

非西欧地域のさまざまな地域の在来の「伝統的」な知識や知識体系は、「民族科学」(エスノ・サイエンス)と総称される。「民族科学」は医療、薬物、動植物、地理、宗教、法など、生活文化の様々な局面に関わる地域の「知」であるが、このような地域の「知」の体系は従来の西欧的の科学に対して、新たな地平を切り開く可能性を持っている。たとえば、合衆国などでは、熱帯地域の伝統的な医療や薬物の知識を正確に把握する必要性が、地球温暖化現象に対処する方策として強く認識されるようになってきている。あるいは、人間の生物学的身体を対象として診断や処方一般化された西欧医学に対して、かつては「非科学的な習俗」としか見なされなかった世界各地の民族固有の医療が、精神や生活を含めて個々のクライアントに対処する「癒し」の医学として評価されはじめている。民族医学に限らず、世界の諸民族の固有の世界観にもとづいた「民族科学」は、多様な環境と歴史のなかで育まれた「知」の体系であり、人類が共有すべき知的財産だと言えよう。

しかしながら、いわゆるグローバリゼーションの進行とともに、このような在来の知の体系は急速に失われつつある。したがって、世界の諸民族の民族科学について早急に記録と分析をおこなって、文化保全の方途を考える必要がある。

本研究では、文化的多様性の保全の基礎的作業として、アジア・アフリカ地域における在来のさまざまな知の体系について記録と分析をおこなった。この報告書は、その成果をまとめたものである。諸民族集団の知識体系は多面的であるので、報告が総花的になることは致しかたないとも言えるが、時間的制約のために、諸民族集団のさまざまな知のあり方に通底する西欧的の科学に対置される論理や感性の諸特徴の考察まで研究を進めることができなかったことは残念であった。この作業は今後の課題としたい。

2008年3月

研究代表者

富山大学人文学部 竹内 潔